『ラ・ジュテ』の物語構造と「フォト・ロマン」というその独自の形式との関係について

伊集院　敬行　島根大学

はじめに

クリス・マルケル（Chris Marker, 1921–2012）の短編映画『ラ・ジュテ』（*La Jetée*, 1962）において，主人公の強迫観念の正体が実は自分自身の死であったという偶然の一致と，真実を知ったときにはすでに手遅れであったという悲劇を可能にするのが時間旅行という仕掛けである。幼少の頃にオルリー空港で見た，崩れ落ちる男とそれを見て驚愕する女という光景に囚われて成長した主人公は，時間旅行で彼女とめぐり逢い，恋に落ちる。そして物語の結末，遠ざかる意識の中で彼は，その強迫観念の中の男がほかならぬ自分であったことを知る。だが，『ラ・ジュテ』は本当に偶然の一致の物語なのだろうか。

もちろん，幼少の主人公が自分の見た光景が自分自身の死を意味していることに気づくことは理屈ではありえない。だが，それでも我々は「彼が心のどこかで自分の見たものの意味を知っていたのではないか」と思ってしまう。ある意味でそれは間違っていない。というのも，この物語にエディプスのシナリオが見られるからである。本発表はこの点に注目することで，『ラ・ジュテ』に見られるさまざまな特徴，1）奇妙な時間旅行の描写，2）フォト・ロマン，すなわち写真小説という全編ほぼ静止画という形式と，その中で一瞬だけ動く映像との対比，3）時間旅行がもたらす物語の円環構造について考察する。

1. 自由連想としての時間旅行

『ラ・ジュテ』で描かれる時間旅行では，時間旅行者はその身体を現在に残したまま，精神だけで移動しているように見える。通常の時間旅行で可能な物語を語るために，わざわざ不自然な方法を用いる理由はない。あるとすれば，そのように描くことがマルケルの目的に適うからである。では，その目的とは何か。それは夢を通した記憶の再体験を描くことだったと考えるのが自然だろう。

夢を通して時間を遡り，忘れていた記憶を思い出す。これはまさにフロイトの精神分析が目指すものである。とすればこの時間旅行の果てに主人公の強迫観念の正体が明らかになるのは，自由連想によって過去に遡ることで患者がその身体症状の原因となった体験を思い出すことに相当する。

では，自由連想としての時間旅行は主人公をどこに連れて行くのだろうか。それは彼のエディプス期である。登場人物にエディプスの三角形を当てはめてみよう。すると，主人公が子，女が母，そして科学者が父となるだろう。この場合，女に駆け寄る主人公がピストルで撃たれて崩れ落ちるというオルリー空港での出来事は，男児のエディプス的願望の成就を阻む「去勢」を意味する。ただし，冒頭の空港の場面が示すように，主人公に取りついたこの光景には彼自身の死という意味が抜け落ちていた。したがって彼の強迫観念としてのこの光景は，去勢の否認としての「隠蔽想起」ということになる。

しかし，最終的に主人公は去勢を受け入れる。それが最後の空港のシーンである。この二度目の空港の場面で自身の強迫観念の光景を自ら演じるとき，主人公はついにその正体を知るのである。

2. 映画の中で唯一動く映像：女の瞬き

主人公が時間旅行で過去に遡り，強迫観念の中の女とデートを重ねることが，自由連想とそれによるエディプス期の再体験であるなら，ベッドでまどろむ女のシーンは禁じられた母子相姦を意味するだろう。このとき，女は瞬きをしながらこちらを見る。それは我々の心を激しく揺さぶる。だがそれにしても，なぜこの場面はこれほどまで我々の心を揺さぶるのだろうか。

その理由は，この場面が劇中で唯一動く映像であるからだけでなく，ここで動くのが瞼であるからでもある。瞬きにより眼差しは，現れたり消えたりする。眼差し，声，乳房，糞便のような，母と共に現前と消失を繰り返すものが，「ある」と「ない」のようなペアの記号と結びつき，その現前と消失が対立させられると，これらの対象とそれが表す母は，単に「見えなくなったもの」であること（視覚的な差異から生じる“無さ”）をやめ，「不可能なもの，禁止されたもの」（対立から生じる「無」や「死」のような“無さ”）となる。ラカンはこれを「物の殺害」と呼ぶ。そして「物の殺害」によってどこにもないものとなったものを「対象 a」と名付けた。

このように子は言語により母を禁止され，それを欲望する者となる（去勢）。ただし，これは主人公だけのことではないだろう。我々観客も，瞬きする女の眼差しに向き合うとき，母の元へと回帰すると同時に，言語の獲得とそれによる母の喪失としての去勢も再体験するのである。

3. 死の欲動の反復強迫としての円環構造

『ラ・ジュテ』では，女の眼の瞬きに魅了され，それに触れようとした主人公は，まさにその罰を受けるかのように，彼女に辿り着く直前に科学者に撃たれて死んでしまう。これは我々の生そのものである。たとえそれが語る主体としての死をもたらすものだとしても，語る主体である以上，我々は言語が仄めかす母のもとへと駆り立てられる。

これがフロイトの言う「死の欲動」ではないだろうか。そしてそうだとすれば『ラ・ジュテ』の時間旅行が作り出す円環構造は，死の欲動の「反復強迫」である。ここでは主人公が幼少のころに体験した去勢と成人してからのその再体験が，時間旅行によって一つの出来事に重ね合わせられ，その結果，物語はまるで円環を描くものとなっている。我々は語る主体になったことで母への傾き，すなわち死への傾きを持つ者となった。『ラ・ジュテ』はこのような我々の運命を描いた映画であり，円環する時間の中で女の眼が瞬くたびに，母との再会と別れを我々に繰り返させるのである。

おわりに

以上の考察から見えてくるのは，『ラ・ジュテ』の見事な構造美である。一体，それはどのようにして生み出されたのだろうか。『リベラシオン』の2003年5月5日のインタビューを自身が英訳したものでマルケルは，以下のように述べる。

> それは一編の「自動記述」のようにして生まれました。私は自分がまだ完全に理解していない物語の写真を撮影しました。そのパズルの断片としての写真の数々は編集で一つになりました。そしてそのパズルをデザインしたのは私ではありません。

この発言は，『ラ・ジュテ』の制作がマルケルの意識的な行為ではなく，彼の無意識的な行為であることを示唆している。

映画の場合，一般に映画それ自体をデザインの語で語ることは少ない。だがインタビューとはいえ，マルケルは映画をデザインの語で語り，しかもそのデザインの主体が，意識的，合理的な思考ではなく，集団の無意識であることを仄めかしている。ここにデザインの概念を拡張・発展させていくヒントがあるように思われる。